

競泳女子の池江璃花子選手が白血病を告白し、日本全国に大きな衝撃が走りました。そして、国内外から温かなエールが送られています。

自民党竹下派の竹下亘会長も1月に記者会見し、食道がんの治療を始めると発表しました。今や有名人ががんを告白することはふつうの行為になっていきます。

安倍晋三首相の実父である晋太郎氏は、総理のイスを目の前にした1991年に膵臓(すいぞう)がんで亡くなりましたが、死亡直前まで告知を受けていなかったと報道されています。この30年で、がんの告知や告白は当たり前前の行為になりました。

私も自身で早期に膀胱(ぼ

## がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

をあてる」などと説明していたことを覚えていきます。

しかし患者、家族、医療者がチームとして情報を共有しないかぎり、適切な治療は難しくなります。複数の選択肢があっても患者に選んでもらえませんか、以前は医師が勝手に治療法を決めるのがふつうでした。

かつては「がん＝死」とい

最近はやほどの事情がないかぎり、ほぼ100%、本人にも告知をします。

この背景にはがん治療が進歩し、治療率が高くなってきた(がん全体で6割、早期であれば多くのがんで9割以上)ことや、自己決定権、知る権利、個人情報などを尊重する意識が高まってきたことがあると思います。治療の開始に本人の同意が求められるようになってきたことも大きいでしょう。

がんの臨床現場では、この30年でたくさんの変化が起きました。なかでも一番劇的かつ印象的なことは、がんをふつうに語るようになったことだと思います。

(東京大学病院准教授)

## 告知や告白、当たり前前の行為に

うこう)がんを発見して内視鏡切除を受けましたが、知人には正直に話しています。隠しだてするより、私も周囲もはるかにラクだからです。

しかし、私が医者になった

34年前はがんの告知は全く行われていませんでした。

私も肺がんは、肺にカビが生える「肺真菌症」といった説明をしていました。放射線治療をするときに「カビに光

治療をするときに「カビに光